

高齢者にやさしい社会

中 一

一 昨年の夏、曾祖母が足を骨折して病院に入院しました。曾祖母は、骨粗しょう症という、骨が弱くなる病気になってしまいました。少し転んだだけで骨が折れてしまったり、ひびが入ってしまったりする、とてもこわい病気です。長い入院生活のため認知症も進んでしまい、一人でトイレに行くことも困難になり、施設に入ることになりました。

もともとは、誰とでもすぐに仲良くなってとてもおしゃべりだったけれど、認知症になってからは、家族以外とはあまり話をしなくなってしまうました。施設に遊びに行くと、とても喜んでいて、私たちに会うのをとても楽しみにしていました。糖尿病もわずらっていたので、食べたい物も食べることができず、水分さえ制限されて、とてもかわいそうでした。施設の中では、たくさん催し物があつたり、楽しい行事がたくさんあつたので

すが、あまり楽しんでいる様子はありませんでした。きつと、すぐくさみしかつたのでしよう。どんなに楽しいことがあつても家族と離れて暮らす苦しみは、私たちが思うよりずっと深いものだったのでしよう。時々、私と妹の名前をまちがえたり忘れてしまうこともありました。ある時、母が、曾祖母にこんなことを聞きました。

「忘れてしまうことをこわいと思ったことはある。」
すると、曾祖母はこう答えました。

「もしも、私がすべてを忘れてしまつても、みんなが私のことを覚えていてくれたらそれでいい。忘れることよりも、忘れられることのほうがこわい。」

その言葉を聞いて涙が出ました。曾祖母の言葉は、いつも私の心を動かします。誰かの一言で、これからの自分の生き方まで変えてしまう。言葉とは、そういう重要な物なのだと思つて感じました。

施設には、一人では生活するのが困難な人がたくさんいました。車いすに乗り一人で歩くことができない人、ご飯を自分では食べられない人、寝

たきりの人、またトイレに行けない人はおむつをし、それらを全て手助けしている人がいるということ。家族でも、手助けすることは大変なことなのに、仕事とはいえ施設で働く人たちはすごいなと思いました。ここでは、一人で生活できない人たちの人権が、確かに守られているのです。歩けない人を車いすに乗せておくのではなく、リハビリをして少しでも歩けるように練習したり、寝たきりの人は体の向きをまめに変えたり、手足を動かしたりする。トイレに何度も連れて行っておむつに頼りすぎないようにする訓練や、ぬり絵に習字、折り紙など、障害や体調に合わせて色々考えられた生活スタイルが提案されていました。

私たちも必ず年を取ります。いつか自分も同じように、誰かの手を借りて助けてもらいながら生きていかなくはならない日が来るのです。今までも一人で生きてきたわけではありませんが、自分の意思とは裏腹に、やりたいこともできない、思うように体が動かなくなる時が来るのです。だから今、自分ができることは何か、自分がそうなった時、どうしてほしいか。そういう風に考えると、

もっと人に優しくできるのではないのかと思いましたが。

平成二十七年四月、曾祖母は他界しました。色とりどりの花が咲きほこるこの季節、母が、歩けなくなつた曾祖母を背負って一緒に桜を見に行つたことは、忘れません。そしてこの季節が来るたびに、お花見に行くたびに、曾祖母と過ごした日々を思い出すでしょう。高齢者が住みやすい生活環境を整えるために、介護施設だけではなく、地域が協力し、福祉設備の充実した町づくりをしていくことが必要なのではないかと感じました。高齢者が安心して生きがいのもてる暮らしができるように、身近なところから私も協力していきたいと思いました。最後にこのような経験から、私が感じ学んだことを一文にし、書き残したいと思えます。「誰かのためは自分のためになる。思いやりは、優しさに変わり、自分の心を豊かにする。」この言葉を多くの人たちへ伝えていけるようにたくさん活動をしていきたいと思いました。